

「家庭でもできる金融教育」

愛媛県金融広報アドバイザー
岡田 純子

●親子で一緒に「お金」について考えることが「金融教育」の第一歩！

お金（の考え方、仕組み）は、私たちの生活・経済活動と多方面で密接に関わっており、金融に関する知識や情報を正しく理解し、主体的に判断することは、社会で生きていくために必要不可欠な能力（金融リテラシー）となっています。しかしながら、日本人は金融リテラシーが低いという話をよく聞きます。また、年金だけでは老後の資金不足が心配される中で、政府の「貯蓄」から「投資（資産形成）」への政策転換もあり、若年時から生涯を見通した家計管理や生活設計（資金計画）が必要とされ、金融リテラシー向上、金融教育の重要性が高まっています。

学校教育に金融教育を取り入れる取組みも始まっており、政府や金融・教育機関などから多く金融教育のテキスト等が公開されていますが、今回は何か特別な教育プログラムを受講するというようなことではなく、身近なところからできる、家庭でもできる金融教育について考えてみました。家庭で「教える」ことはハードルが高いと感じる方も多いと思います。まずは、親子で共に考え「学ぶ」、子どもが「経済や金融の仕組みや役割」に興味を持つ環境や「きっかけ」をつくることから始めてみてはいかがでしょうか？必要とされる金融リテラシーは、時代によって変わります。生活に関わる学びは続けることが重要で、「好きこそものの上手なれ」の言葉通り、嫌い（苦手）にならないこと、興味を持てることが大切です。


●数字を使って具体的に理解する！

現代社会は数学で動いていると言っても過言ではなく、至る所で数学が使われています。もちろん、金融教育においても数学は必須で、知らないと生活の中で多くの損をすることになります。しかしながら、日本人の多くは、AIの時代にも関わらず数学嫌いだと言われていました。「数学が大人になって何の役に立つかわからない」のは、日常生活との関わりがわからず、生活に必要な道具として身近に感じられていないからで、物事を感覚的に考えるのではなく、数字を使って具体的に考える方が、わかりやすく役に立つことを体験すれば、使いこなすことが楽しくなり、数学を学ぶインセンティブにもなるのではないのでしょうか。例えば感覚的に判断できない、ちょっと複雑な変動金利やリボなどの分割払いなども、状況によって変わるものを変数にしてグラフや表を活用すると、わかりやすくなり、賢く判断ができるようになるはずですよ。


●リアルビジネスゲームで興味関心を高める環境づくり！

家庭でもできる金融教育として、新型コロナウイルスで一斉休校中の娘（小5）に、一人で行えるリアルビジネスゲームをさせてみました。今回は、主にお金の持つ機能「価値尺度」について考えさせる内容としました。チョコバナナマフィンを作って、家族に販売するビジネス体験をさせ、原価を計算し、「価格はどのようにして決まるのか？」を考えさせます。最近では、オープン価格が多く、需要と供給のバランスで価格が大きく変動します。安くなるだけでなく、非常に高くなることもあるので、消費者自身が価格の判断基準を持ち、賢い消費者となることが家計管理においても重要です。原価を考えることは、ひとつの基準として価値を判断する助けとなると思えます（原価+どの程度欲しいのか=価格が妥当か）。

下図は、今回のマフィン販売ゲームで使った計算例です。



「チョコバナナマフィン」の販売！



※購入した材料を約40gのマフィンが12個作れる分量に直して計算する。

[仕入] 材料:		購入した材料
ミックス粉 200g	324円	(324円/200g)
チョコチップ 25g	72円	(723円/250g)
卵 1個	21円	(213円/1パック)
牛乳 200cc	42円	(208円/1リットル)
バナナ 1本	53円	(213円/4本)
合計	512円	

[製造] 光熱費：50円と仮定（180℃で20分加熱、人件費0円）

☆マフィン1個あたりの原価を計算

(材料費 512円 + 光熱費 50円)
/12個 = 約 47円 / 個

利益を加えて販売価格を60円に決定!

利益13円/個 × 12個 = 156円の儲け

座学に比べて、体験学習は遊び感覚で子どもの食いつきが違います。子どものレベルに応じて、材料の仕入費用を借り入れることにして金利について考えさせたり、仕入れた材料の残りを在庫とし、保管費用や在庫処分による損失を考えさせたり、ゲームのルールを工夫し、学びの範囲を広げていけば、幅広い分野に興味を広げることにつながります。また、どんなビジネスをゲームにするのか、ゲーム自体の設計を考えるようになると、何で儲かっているのか、ビジネスモデル（収益構造）を考えるようになり、社会の仕組みを構造的に理解する目を養うことになると思います（例えば、YouTubeのような無料でサービスを提供する会社は何で儲かっているのか？製造原価だけでなく、肩もみやマッサージ提供をするサービス会社をゲームにするなど、いろんなビジネスの原価を考えてみるのも面白いかもしれませんね）。

●金融教育は生きるための勉強！

最近では、子ども向けの金融関連書籍も多く出版されており、公立図書館で借りることもできます。ネットワーク環境があれば、簡単に金融情報を入手することも可能で、子ども向けのサイトも増えてきました（例えば「知るぽると」、「金融庁金融教育」で検索）。無理強いするのではなく、「急がば回れ」で自発的な探求心を育てることが大切です。親子で考え、一緒に学ぶ相乗効果で、親の金融リテラシーも向上するとおおいですね。